

性犯罪・性暴力被害者支援の特徴

—支援者へのインタビュー調査から—

目白大学人間学部心理カウンセリング学科 齋藤 梓

清泉女学院大学 人間学部心理コミュニケーション学科 岡本かおり

【要 約】

近年、各地に性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップセンターが設立され、さらに民間の犯罪被害者支援センターや警察、検察、弁護士、医師、行政、心理等様々な機関、専門職が性犯罪・性暴力被害者に対し支援を行っている。しかし未だ十分とは言えず、支援の形を模索している場合も少なくない。そこで本調査では、性犯罪・性暴力被害者支援の特徴や工夫について明らかにするため、これまで支援に携わってきた支援者を対象とし、性犯罪・性暴力被害者支援および支援における連携の工夫や課題についてインタビュー調査を行った。11名の弁護士および民間被害者支援相談員に調査を行い、得られたデータを質的に分析した結果、【性犯罪・性暴力被害の背景】、【支援者からみる性犯罪・性暴力被害者の抱える困難と回復】、【性犯罪・性暴力被害者支援の特徴】、【連携の特徴】という4つのメインカテゴリが生成された。性犯罪・性暴力被害者支援は、被害者の「精神的な不安定さが強い」、事件にまつわる「意思決定が揺らぐ」、支援の途中で「連絡が取れなくなる」といった支援の難しさがあることが語られた。支援者は、被害者に「人としての尊厳をもって関わる」「意思・意向を尊重する」ことをしながら、被害者に「連携先への信頼（を見せる）」、「ある程度の強引さ」をもって支援につなぐといった工夫をしながら、支援を行っていることがわかった。

キーワード：性犯罪・性暴力、被害者支援、質的研究

問題

現在、犯罪被害者等基本法に伴い策定された第3次犯罪被害者等基本計画（2016）を受け、各地で性犯罪・性暴力被害者支援のためのワンストップセンターが設立されている。他にも、公益社団法人全国被害者支援ネットワーク傘下の民間被害者支援団体が、各都道府県にて性犯罪・性暴力被害を含む犯罪被害者への支援を行っている。さらに警察や検察、弁護士会や産婦人科医師会等様々な機関、団体が、性犯罪・性暴力被害者支援に関する研修を開催し、制度を整え、支援にあたっている。しかしこれらは、この10余年の間に急激に進んだ動きである。小西（2016）は、性暴力被害者に特化した総合

的な政策や法の整備の遅れを指摘しており、性犯罪・性暴力被害者の支援は、未だ体制が整っているとは言い難い。

警察庁（2015年）による「平成26年度犯罪被害類型別調査」では、K6によって「重症精神障害」相当とされた回答者の割合は殺人・傷害、交通事故、性犯罪のうち性犯罪が最も高く29.7%であった。また齋藤・鶴田・飛鳥井（2008）は、性犯罪・性暴力被害者は、強い精神的後遺症、およびそれによる情緒不安定性を示す場合があると述べている。さらに法務省（2015）の「性犯罪の罰則に関する検討会」取りまとめ報告書にも記載があるように、暴行・脅迫要件等の問題で事件が起訴に至らない場合

があるなど、刑事手続き上の問題も存在する。性犯罪・性暴力被害は、被害者に重大な精神的後遺症をもたらす、刑事手続も困難が予想される。そのため、第3次犯罪被害者等基本計画でも特に言及されているように、被害者への支援が重要となる。

現在、上述した民間被害者支援団体にて、性犯罪・性暴力被害者を含む犯罪被害者に対し、警察や検察、公判への付添い支援、弁護士の紹介、精神的ケアの提供あるいは精神医療の紹介といった、総合的な支援を行っている。また、被害者支援を専門とする弁護士が、被害者から依頼を受け、警察や検察、公判への付添い支援を含む司法手続きの支援を行う場合もある。しかしそれぞれの支援は未だ構築され始めた段階であり、今後、性犯罪・性暴力被害者が適切な支援を受けられる体制を一層充実させていくことは、社会の喫緊の課題であるといえる。そしてそのためには、性犯罪・性暴力被害者の支援に携わってきた支援者たちの知見を総合し、現状や今後の課題を検討することが必要であろう。

これまで、性犯罪・性暴力被害当事者を対象とした調査や、犯罪被害者支援全般に関する調査は行われてきたが、性犯罪・性暴力被害の支援者に特化した調査は、多くは行われていない。齋藤・元木・鶴田・萱間・飛鳥井（2010）は、民間の被害者支援団体14か所の職員23名を対象にインタビュー調査を行い、犯罪被害者支援における連携を促進する要因について検討を行った。その結果、連携においては、被害者のニーズを把握した上で、役割分担をして支援にあたることが重要であるという結果が得られた。また大岡・伊藤（2016）は、地方公共団体にアンケートを実施し、回答のあった364か所（回収率20.3%）について分析を行い、未だ多くの自治体で相談件数が少ないという犯罪被害者支援の現状を明らかにした。さらに大岡・野坂・中島・岩切（2015）は、民間被害者支援団体が実施した性犯罪被害者に対する101件の支援を対象に、レトロスペクティブ調査を行っている。その結果、支援につながった被害者・者が少ないこと、支援に至ったとしてもその影響の深刻さに反して関係機関の連携が多くは行われていないことが明らかになった。大岡ら

（2015）は、「支援団体の支援のさらなる充実を図りながら、関連機関で連携し犯罪被害者支援を進めていくことが求められる」と述べている。性犯罪・性暴力被害においては、支援や連携の重要性が指摘されているが、なぜ、未だ支援や連携が多く行われていないのだろうか。性犯罪・性暴力被害は、精神的後遺症の重大さといった被害者自身の呈する状態、刑事手続の困難性等、支援あるいは関係機関の連携において、通常の犯罪被害者支援とは異なる支援の課題や特徴が想定される。一層の支援の充実を図るためには、量的実態調査では明らかになりにくい、課題や特徴の具体的な内容を明らかにする必要がある。

そこで本調査では、支援に携わってきた支援者たちにインタビューを行い、性犯罪・性暴力被害者の抱える困難、それを踏まえた支援、および支援における連携の具体的な困難や工夫について支援者の知見をまとめ、有用な支援の在り方を検討する。齋藤ら（2010）の調査は犯罪被害者支援全般が対象であったが、今回の調査では性犯罪・性暴力被害者支援に焦点づけ、特徴を明らかにする。そして性犯罪・性暴力被害者支援の困難とそれを補う支援の在り方について考察する。支援の具体的な内容に踏み込む調査であり、アンケート調査では回答内容に限りがあると考えられるため、本調査ではインタビューを使用して質的に調査を行う。

方法

対象：性犯罪・性暴力被害者支援に5年以上携わっている弁護士および民間被害者支援団体相談員（以下、相談員と記す）11名を対象とした。本調査では、性犯罪・性暴力被害者支援の特徴を明らかにするため、性犯罪・性暴力被害以外の犯罪被害者支援にも関わり、さらに性犯罪・性暴力被害者支援にも携わっている支援者（以下、支援者と記す）を対象とした。まず公益社団法人全国被害者支援ネットワーク傘下の団体のうち、年間の支援総数の多い民間被害者支援団体に調査協力を依頼し、さらに性犯罪・性暴力被害者支援の実績がある弁護士に調査協力を依頼した。

民間被害者支援団体は、主に身体犯と呼ばれ

る殺人や強盗、性犯罪の被害者及び遺族に対し、付添支援や精神的支援を無料で提供している団体である。相談員は、被害者のニーズを聞き取り、必要な支援を組み立て、司法機関への付添、生活支援の検討、関係機関紹介を行う。また、弁護士も、被害者支援を行っている者は、被害者のニーズを聞き取り、司法機関等への付添、生活支援の検討、精神的ケアの紹介等を行っている。今回、弁護士および支援団体相談員を対象とした理由は、専門性は異なるが、警察や検察等の公的機関と異なり、被害者のニーズを中心に支援を組み立てるという立場に立ち、刑事手続支援、司法機関への付添支援、および幅広く生活全般、精神的支援にも関与する活動を行っているためである。インタビュー協力者の職業、性別、現在の業務に携わっている年数は表1の通りである。なお、個人の特定を避けるために年齢は記載をしていないが、20代から70代まで幅広い年齢層であった。

表1 インタビュー協力者

	職業	性別	職業に携わった年数
law1	弁護士	女性	10年以上20年未満
law2	弁護士	女性	5年以上10年未満
law3	弁護士	女性	10年以上20年未満
law4	弁護士	男性	10年以上20年未満
law5	弁護士	女性	20年以上
law6	弁護士	女性	20年以上
law7	弁護士	男性	10年以上20年未満
sou1	相談員	女性	10年以上20年未満
sou2	相談員	女性	10年以上20年未満
sou3	相談員	女性	5年以上10年未満
sou4	相談員	女性	5年以上10年未満

インタビュー実施：インタビューは、2015年9月から同年12月に行った。インタビュー時間は、概ね1時間半程度であった。事前にインタビューガイドを作成し、半構造化して行った。はじめに「性犯罪・性暴力被害者支援におけるインタビュー協力者の業務内容、役割」について尋ね、「性犯罪・性暴力被害者支援において難しいと感じている点、特に性犯罪・性暴力被害者の特徴を踏まえた点」「他の被害の支援と異なる点」「他の機関や他の専門職と連携を取り

たいと思ったとき」「連携の形」「連携がスムーズに進行する工夫」「連携に対する意見」等について尋ねた。インタビューは協力者の同意のもと、録音し、逐語録を作成した。個人情報を含めずにインタビューに回答するよう求めたが、個人情報が入っていた場合は、逐語録作成段階で該当箇所を削除した。

なお、本インタビューは、性犯罪・性暴力被害者支援に関する具体的かつ詳細な聞き取りを目的としたため、被害者支援関連分野での実務経験が10年以上ある第一著者が務めた。研究実施者が行うことで、協力者の回答内容が主旨に沿うよう歪められる可能性があるため、調査協力者には事前にインタビュー内容を伝え、ある程度事前に回答を考えられるようにした。さらに、インタビューの際は調査協力者の語りに沿うよう注意を払った。

分析方法

質的分析の分析方法は様々である。しかし、逐語録データ等のローデータを繰り返し読み、意味のまとまりごとにデータを切り出し、共通点と差異を検討しカテゴリ化を行い、さらに各カテゴリの関係を検討することでテーマとなる概念を抽出し、現象の説明を試みるという方法論上のプロセスは多くの分析方法で共通している（グレッグ・麻原・横山，2007）。本調査においても、基本的にはこのプロセスに沿って分析を行った。ただし、支援者から支援の特徴を聞き取り明らかにするという研究目的に鑑み、カテゴリ間の関係性を検討することよりも、カテゴリ化、類型化を通して特徴を明確にすることに重点を置いた。

まず、11例の逐語録のうち3例ずつ、第一著者と第二著者が分析を行った。逐語録を意味のまとまりごとに切り出し、それぞれのまとまりの要約を「ラベル」としてつけ、さらにそのラベルを抽象化させ「コード」とし、「コード」を比較検討しながらカテゴリ化した。その後、「コード」および「カテゴリ」について意見のすり合わせを行い、本分析を行った。本分析の手順は以下のとおりである。

①データの切り出し：研究の目的に沿って、性犯罪・性暴力被害者支援の特徴、性犯罪・性

暴力被害者の抱える困難、性犯罪・性暴力被害者支援における連携について述べている部分を、逐語録データから抽出し切り出した。

②データの要約：切り出したデータの意味内容をよく吟味し、そのデータの内容を表す要約として「ラベル」をつけた。

③データの分類：ローデータおよび「ラベル」を吟味し、それぞれが性犯罪・性暴力被害者支援、性犯罪・性暴力被害者、連携のうちどれについて述べているものか分かるようにした上で、抽象度を上げた「コード」を付けた。

④カテゴリの生成：「コード」を元に、「コード」の類似性や差異に着目し、「カテゴリ」を生成した。

⑤カテゴリの類型化：カテゴリ及びカテゴリをまとめたサブカテゴリを作成し、コードの内容も考慮し類型化した。性犯罪・性暴力被害者支援の特徴、性犯罪・性暴力被害者が抱える困難、性犯罪・性暴力被害者支援における連携を抜き出したが、最終的に、性犯罪・性暴力という被害自体がもつ社会的問題が背景にあると述べられているカテゴリも生成されたため、「性犯罪・性暴力被害の背景」を新たに加え、メインカテゴリは「性犯罪・性暴力被害の背景」「支援者からみる性犯罪・性暴力被害者が抱える困難と回復」「性犯罪・性暴力被害者支援の特徴」「連携の特徴」の4つを設定した。

分析結果は、妥当性の検証のため、データの匿名性を維持した上で、調査協力者とは別の、10年以上の犯罪被害者支援経験をもつ民間犯罪被害者支援団体相談員および臨床心理士に開示した。その結果、分析結果と支援の実態とに大きな矛盾のないことを確認した。

倫理的配慮

本調査の実施にあたり、研究計画立案時に所属していた上智大学の「人を対象とする研究」倫理審査の承認を得た。調査協力者には調査の主旨を丁寧に説明し、調査は何時でも中止できること、個人情報を守られること、データは厳重に保管されること等の説明を行った。その上で、同意が得られた場合のみ、調査を実施した。

結果

以下、【性犯罪・性暴力被害の背景】【支援者からみる性犯罪・性暴力被害者が抱える困難と回復】【性犯罪・性暴力被害者支援の特徴】【連携の特徴】の4つについて、サブカテゴリ、カテゴリ記載する。なお、以下、メインカテゴリを【 】、サブカテゴリを『 』、カテゴリを「太字」で、調査協力者の言葉を＜イタリック＞で記載する。前後の文脈を補う必要がある場合は（ ）で表記する。また、末尾に調査協力者の番号を記した。なお、メインカテゴリ、サブカテゴリ、カテゴリ、対応するローデータ例の一覧を表2に示した。

1. 【性犯罪・性暴力被害の背景】

【性犯罪・性暴力被害の背景】は、支援や被害者の問題以前に、前提として性犯罪・性暴力被害に特有の社会的背景があるという語りから生成された。『社会の理解の不足や偏見』『性に関する被害である特徴』の2つのサブカテゴリから成る。

1-1. 『社会の理解の不足や偏見』

『社会の理解の不足や偏見』は、「知識・制度が普及していない」「社会的偏見がある」「刑事や民事の手続がむずかしい」の3つのカテゴリから生成された。

性犯罪・性暴力被害では、近年、司法関連機関で様々な制度、対応策がとられている。しかし＜（検察官でも被害者支援制度の）運用の仕方を知らない方って、結構多いんですね（law3）＞等、「知識・制度が普及していない」場合もあるということだった。また、被害者の落ち度責めるような考え方も根強く残っており「社会的偏見がある」というカテゴリも見いだされた。例えば＜被害者は悪くないのに、その被害者にも、否があるような蔑視、（中略）あの人、性被害、要するにもうセックスをそういう、こういう風にされてしまったんだよっていう、社会の目がまだあるような気がする（sou1）＞等と述べられていた。さらに＜被害直後に警察に飛び込んだにも関わらず受け付けられないとか、（中略）犯罪のやっぱり特殊性、顔見知りかどうかとか、だから傷害とか何かと

表2 カテゴリ対応表

メイン カテゴリ	サブカテゴリ	カテゴリ	
背景 性犯罪・性暴力被害の	社会の理解の不足や偏見	知識・制度が普及していない	現場にいる警察官の人が、(弁護士を紹介する制度を)あまり知らなくて。知らないんですよ。(law1)
		社会的偏見がある	よく言われる強姦神話とか、(中略)この社会の中で、ある意味、その固定観念になってしまっている (law3)
		刑事や民事の手続が難しい	性被害の場合、なかなか、その立証するのが難しくって、不起訴になることが多いじゃないですか。(sou2)
の支援者から 抱える困難と回復	性に関する被害である特徴	もともと性に関することは人に話さない	例えば性器のことを何て言うかということね。それ被害者の使う言葉と、捜査をする側の男性警察官とか違うはずなのよ。(law5)
		精神的な不安定さが強い	多くの人は、PTSDか、それに近い症状になってるでしょ。だから、そういう症状、そういう状況の人に、ちゃんと説明を理解してもらって、判断を求めるっていうのは結構酷なことだよな (law5)
		自責感や恥等の認知を抱いている	すごく自分に対して否定的になってるでしょう、被害者の人ってね。だから、そのことが非常に話しをするの、本人を難しくしてるし (law5)
		事件内容を話すことに話しづらさを感じる	交通事故は、思い出して辛いっていう人はいるかもしれませんが、そんな話す時に恥ずかしいとかもない (対照的に、性犯罪・性暴力被害者は、話すことをためらう場合がある) (law3)
		援助要請にしづらさを感じる	他の人に相談できていないというのが多いですよ。あと、親に知られたくない。(law2)
		意思決定が揺らぐ	一般民事だったらまだ別ですけど、刑事裁判ってバツバツバツバツ期日が入っちゃうから、待っててもらえないんですよ、(中略)決められない、お任せしますって言われても、(被害者の意思を無視するような) そんなことできないから。(law1)
		回復する可能性がある	性犯罪被害のほうは、そのときは大変かもしれないけど、みんななんとか、支援機関とかにかかって超えて行ってくれるので。今のところはそんなに、もうこれはやってられんというのはいないですね。(law2)
性犯罪・性暴力被害者支援の特徴	支援の難しさ	事件内容を聞くことができない／しない	まず被害内容を聞けないですよ。被害内容を、私、ほとんど聞かないですね。(law1)
		状態の把握が難しい	やっぱり、(被害の影響が)見えなし、怪めたいに、交通事故で怪めましたとかいったら、松葉づえが取れましたとか、体育に参加できましたとか、はっきりすると思うんだけど。(sou4)
		連絡が取れなくなる	性被害の場合に、多分その頻度が多いんだと思うですよ。それは話の内容があんまり人に言いたくないという気持ちがありながら、その一方で、きちんと乗り越えていくためにはお話しなきゃいけないっていうところで、ご本人がかなり葛藤があって、そういう中で、あるときは頑張ってお話とかしてくれているんだけど、それが閾値を超えて耐えられなくなったときに突然拒否に走ってしまうということなんじゃないかなと思うですよ。(law4)
	支援における工夫	つながりにくい	かなり、警戒されてる感じはするんですよ。やっぱり、こちらの。この人が信用できるのだからとか、ここに相談していいのかなとか。どこまで話そうかなとかということとかもあって、そういうところでは、つながりにくさとか (sou3)
		意思・意向を尊重する	第一原則としては、やはり、そのご本人の意思決定っていうところにはなるんだけど、その意思、ご本人が決めるにあたって、正確な情報を得られているのかとか (気を付けて支援を行う) (sou3)
		権利を尊重する	どうしてもやっぱり、罪はそんなに(法律の中では)大した罪(として裁けない)じゃないですか。その中で、相手に対して、どう、その賠償を求めていくっていうか、ご本人が納得いく形での(権利を行使する)。何か (sou2)
		人としての尊厳をもって関わる	あまり同じ女性同士で上から目線みたいになるのは、すごい失礼かなと思っている (law3)
		余裕を持った支援計画を立てる	時間がかかると。だから、話を聞くときは、普通の事件の倍ぐらい時間取っとく。(law5)
		それぞれの本来業務を全うする	(裁判では)例え弁護士さんがついてたとしても、(司法の)専門家の中にいるっていうことの負担が一応(あると思う)、犯罪被害者支援の専門家っていうふうにいったりとかもしますけど、でも、身近な支援者として(裁判中)傍にいてっていうことが負担の軽減にはなると思います (sou2)
	支援の特徴	精神的サポートが必要	精神的な治療も必要になって考えられることと、(中略)精神的なケアとかね、非常に細かいところまでは私が配慮しなかったりとか(するでの精神的サポートが必要) (law2)
		関わる機関が多い	本当に多方面で、多方面で何ていうんですかね。この前思ってたんですけど、立体的でいろんな方向を向いてっていうのが必要なんだな。(sou4)
		コーディネーターが必要	中心になる人を決めた方がいいですよ。関係者が多いと (law1)
連携の特徴	連携の理由	他の専門性が必要	相手に対して、勝ちたいという時に、それができるのは、やっぱり弁護士さんだと思うので。(sou2)
		精神的サポートのため	検事さんは、やっぱり、その性被害に遭われた方が証人に立たなければいけない時とかには、結構、(精神的サポートのために)こっちを頼ってきたりっていうことがありますし (sou2)
	連携がうまくいく工夫	連絡先の業務内容を把握する	やっぱり相談員の方が見て、もっとリーガルサービスよりもまず精神的な、医学的な治療が必要とか、別のサポートが必要だっていう方は、そちらを優先して連携するので (law4)
		要望をはっきりとさせてつなぐ	具体的にこういうふうな配慮をしてほしいっていうのは、伝えるようにはしています (sou3)
		早いタイミングでつなぐ	できるならば、裁判になる性被害は、[その前に] つないでもらえたらなと思いますけれども。(sou3)
		ある程度の強引さ	必要のある人にはこちらで、「予約取っとくね」とか「一緒に行くね」っていうような一歩踏み出させる、背中を押していくのも、つながりやすさにはなるのかなっていうふうに思います (sou3)
	連携で避けるべき点・課題	連絡先への信頼(を見せる)	お互いの信頼関係がある時はやっぱり、うまくいったかなと思います (sou4)
		連絡を密に(具体的に)行う	ほんとうにこの連絡をスムーズに取り合う、物理的に。それができないと、どうしようもならないですよ (law3)
		機関同士の相互理解がない	やっぱり、相手が何をしているところから分らないと、連携はできないなとは感じています。(sou3)
	連携のメリット	連絡先が性犯罪・性暴力被害に対する知識がない	熱心な支援員の方で、あまり(性犯罪・性暴力被害の)裁判の過酷さを知らない方っていうのもたくさんいて (law3)
		支援に複数の手が入る(内務・外部連携による)	その弁護士と依頼者ととの間に、依頼者を両方を客観的な目で見て、気が付いたことがあればどんどん言うてくださると、すごく助かると思います。(law3)
		本来業務に専念できる	医者に頼んで、そっちの状況、少しよくなってきて、法的な対応のレベルまでできそうになったら、それから、じゃあ、私がその次やるとかって、そういうのすごく大事だと思った、私 (law5)
		信頼できる人が増える	連携してくれると、いただけると思うんですけど有難いですよね。だんだん、人によっては慣れて行って、じゃあこれはセンターの人に話すとか言っていた子もいたような気がするし。(law1)

比べると（支援が）難しいですね（law6）＞等、性犯罪・性暴力被害では、警察が被害届を受理しない、あるいは受理した場合でも加害者からの明確な暴行・脅迫が認められないと検察が起訴できないといった問題があると語られており、「刑事や民事の手続が難しい」は、そうした性犯罪・性暴力被害自体が含む問題を表すカテゴリであった。

1-2.『性に関する被害である特徴』

『性に関する被害である特徴』は、「もともと性に関することは人に話さない」という1つのカテゴリではあったが、『社会の理解の不足や偏見』とは異なり、支援者あるいは被害当事者が性に関することだからこその難しさを感じているという語りから生成された。＜話の内容が性的なお話なので、どうやって話したらいいのかとか、こんな言い方をしたら嫌がるんじゃないとか、（中略）普段なら、（性的なことは）普通に話しをするものではないので（law4）＞等の語りが見られた。

2.【支援者からみる性犯罪・性暴力被害者の抱える困難と回復】

【性犯罪・性暴力被害の被害者が抱える困難と回復】は、支援者が、実際に被害者に関わる中で感じた被害者の抱える問題について語ったラベルから、コード及びカテゴリが生成された。「精神的な不安定さが強い」「自責感や恥等の認知を抱えている」「事件内容を話すことに話しぶらさを感じる」「援助要請にしぶらさを感じる」「意思決定が揺らぐ」「回復する可能性がある」の6つのカテゴリから成るメインカテゴリである。

まず、性犯罪・性暴力被害の被害者は＜エレベーターの中で襲われたというとエレベーターに乗れないとか、犯罪被害と非常に結び付いた状況は足がすくんでしまうとか（law2）＞といったように心身に様々なトラウマ反応を示しており、支援者から見て「精神的な不安定さが強い」場合が多い。また、＜その強姦神話のようなことだったり、（事件について）自分を責めているってようなことが多くある（sou2）＞という語りのように、「自責感や恥等の認知を

抱いている」というカテゴリも見出された。さらに、それら精神的な不安定さや自責感、恥の認知等の影響もあり、＜他の被害に比べて、（事件内容を）話したがない人とか言いにくい、言いたがない人が多い（sou3）＞等「事件内容を話すことに話しぶらさを感じる」、＜被害を受けた辛さが、内にこもっちゃうような感じがするんですよね。すごく、それ（辛さ）を言えないし、周りに言えないし、親にも言えないって方多いんですよね（law3）＞等「援助要請にしぶらさを感じる」といった問題も見られた。さらに性犯罪・性暴力被害では刑事手続や民事手続等の中で被害者が選択し決断をしなければならない局面があるが、＜民事事件の場合だとかでも、自分が原告として裁判を起こしても、途中で裁判が嫌になっちゃうような方も出てきて（law3）＞等、刑事や民事の手続きで一度決めた「意思決定が揺らぐ」状態があるということだった。しかし一方で、＜回復してくれる人が多い（sou3）＞という語り等、被害者が回復していく姿を見た支援者からは「回復する可能性がある」というカテゴリも見出された。

3.【性犯罪・性暴力被害者支援の特徴】

【性犯罪・性暴力被害者支援の特徴】は、『支援の難しさ』『支援における工夫』『支援の特徴』というサブカテゴリから成る。

3-1.『支援の難しさ』

『支援の難しさ』では、背景に被害者の精神的な不安定さがあると考えられる「事件の内容を聞くことができない／しない」、「状態の把握が難しい」、「連絡が取れなくなる」、「つながりにくい」といったカテゴリが見られた。

犯罪被害は刑事手続き等現実での動きを見極める必要があり、被害者に事件の内容を確認することが必要になるが、性犯罪・性暴力被害者支援の場合、＜あの時（事件の時）どうだったのっていうことは本当は喋りたくない話。なので、警察とか検察とちゃんとうまくつながっていれば、私はそこは聞かずに（支援する）。（law2）＞といったように、被害者の状態に配慮し、「事件の内容を聞くことができない／しない」ということだった。さらに、＜（事情聴

取では) 結構事件の内容も供述するんですよね。(中略) 普通にお話をして大丈夫な方なのかと思っていたら、突然、事情聴取が全部終わってから立ち上がることができないとか(law4) >といったように、しっかりしているように見えても精神状態が不安定な時がある等、他の被害よりも精神的な「状態の把握が難しい」というカテゴリも見出された。これは「連絡が取れなくなる」とも関係している。<(支援に) 慣れてきたところに連絡が取れなくなることがある(law1) >等、しっかりしているので大丈夫だと思っていたら、警察、検察、弁護士、相談員が連絡をしても電話に出ない等、連絡が取れなくなる場合があると語られた。また、<(他機関から) つなげていただいても、その後の繋がりにくさみみたいなものがある(sou2) >といったように、紹介されてもなかなかつながらない、あるいは弁護士や相談員等支援者が一度面接をしてもその後連絡が取れなくなることがあると語られ、「つながりにくい」というカテゴリが見いだされた。

3-2. 『支援における工夫』

『支援における工夫』には「意思・意向を尊重する」「権利を尊重する」「人としての尊厳をもって関わる」「余裕を持った支援計画を立てる」「それぞれの本来業務を全うする」というカテゴリが含まれた。

性犯罪・性暴力被害では、意思を否定され、人としての尊厳が傷つけられる(齋藤・鶴田・飛鳥井, 2014)。支援者の語りでは<私自身が目の前の被害者に(信用していないと)疑われないように、いつもいつも白い気持ちでいられるようにしたいっていうのは、自分は心掛けてます(sou1) >等、嘘をつかない、対等な人間として接する等「人としての尊厳をもって関わる」姿勢を重視していると述べられていた。さらに、<事情聴取で調書取られた後、読みきかせてやるじゃないですか。そのときに、自分の言ったことが(調書に) 不正確にしか書かれていなかったら、それ違ってるから訂正してくださいって言う権利あるのよとかっていうことを事前に言っとく(law5) >等、被害者の「権利を尊重する」助言をしていた。また、<本当

に、意向に沿った支援をやっているのかっていう。確認も、よほど慎重に丁寧にやっていかないと、(支援者の) 意見を押し付けかねないなっていう(law7) >といったように刑事手続や支援を行う過程で現れる様々な選択肢について、慎重に被害者の「意思・意向を尊重する」姿勢を取るというカテゴリも抽出された。しかし、被害者が刑事手続等を選択することは時間がかかる。精神的な不調や回避によって、先述のように「連絡が取れなくなる」場合もある。そのため<常にもっと時間的な、気持ち的なゆとりをもてるような、その(支援の) 組み合わせをしていかなければいけないんだな>ということ、思うときはあります(sou1) >と、「余裕を持った支援計画を立てる」工夫が行われていた。

また、それぞれの機関、専門職が「それぞれの本来業務を全うする」ことが、支援において重要であるということだった。例えば<(支援をした結果) 法的に、例えばいい結果が出て、(中略) それが本当に回復につながる時もあるんですよね、すごく。(法的にいい結果がでることで、被害者が) 自分でやっとな(思えて回復につながる)(law6) >等語られた。弁護士は弁護士の、相談員は相談員の本来業務を全うすることが、被害者の回復に資するということだった。

3-3. 『支援の特徴』

『支援の特徴』は、性犯罪・性暴力被害の支援に特有の特徴として語られたものであり、「精神的サポートが必要」「関わる機関が多い」「コーディネーターが必要」というカテゴリから成る。

性犯罪・性暴力の被害者は精神的に不安定な場合があり、さらに刑事手続や民事裁判は被害者に多大な負荷がかかるため<付添支援であったり、いろいろな支援で関わっている中で(中略)、(被害者に) あなたが悪い訳じゃないんだよ、向こうが悪いんだよっていうようなメッセージを何度も何度も周りが投げかける(ことが必要)(sou2) >等、支援全体を通じて「精神的サポートが必要」ということだった。相談員のような被害を理解した人がそばに寄り添う、

精神科への通院やカウンセリングを勧める、弁護士が本来業務を少し超える形で精神的なサポートをする等、語られた精神的サポートの形は多様であった。そして性犯罪・性暴力被害は、＜精神的な症状がうたがわれるときは医療機関、(中略)(その他) 弁護士、検察庁、警察(と連携する)(sou3)＞、婦人科や肛門科等身体科、警察、検察、裁判所、弁護士、相談員、精神科、心理専門職等、「関わる機関が多い」ということだった。しかし多くの機関は、捜査や司法支援、医療行為の提供等、本来業務が限られており、＜寄り添うところが1つあって、そこから、スペシャルなとこに繋がっていく。その核となる、コーディネートできるところが1つあるというのが非常に重要だと思います(law6)＞と、全体を通しての支援やマネジメントをする「コーディネーターが必要」と語られた。

4. 【連携の特徴】

【連携の特徴】として、『連携の理由』『連携がうまくいく工夫』『連携で避けるべき点・課題』『連携のメリット』という4つのサブカテゴリが生成された。

4-1. 『連携の理由』

まず『連携の理由』は「他の専門性が必要」「精神的サポートのため」という、どのような時にどのような理由で連携をしようとするかについてのカテゴリから生成された。

1つには「他の専門性が必要」な時に連携を行うということだった。＜(被害後) 仕事に行けなくなってやめて、経済的にもすごく困っているっていうようなことで、その辺がちょっと、私の専門外だったりもする(ので連携する)(law2)＞等、弁護士が経済的、精神的サポートの専門家が必要だと考えた、相談員が法律家の支援が必要だと考えた、医師の診断書が必要だと考えた等、被害者の支援のために「他の専門性が必要」な場合があるということだった。専門性の中でも、特に＜(被害者が) 誰かと話せた方がずっと気が楽だろうと、辛いだろうと思うことは分かるので、(被害者が) 相談員の方と話せていると安心(して支援ができる)

かなっていうのもありますね(law3)＞等「精神的サポートのため」というカテゴリが見出された。被害者が精神的サポートを受けることで、支援者側も安心して「それぞれの本来業務を全うする」ことができるということだった。

4-2. 『連携がうまくいく工夫』

『連携がうまくいく工夫』は「連携先の業務内容を把握する」「要望をはっきりとさせてつなぐ」「早いタイミングでつなぐ」「ある程度の強引さ」「連携先への信頼(を見せる)」「連絡を密に(具体的に) 行う」というカテゴリから生成された。

被害者を確実に連携先につなぐために、様々な工夫を行っていることが語られた。まず連携の際には「連携先の業務内容を把握する」ことが重要であった。＜センター(民間支援団体)のほうで、私(弁護士)に紹介した方がいいことなのかというのは適切に判断してくれるので(law2)＞等、連携先の業務内容を把握した上で被害者を紹介することで、適切な連携ができていた。そして被害者のためにも連携先のためにも、＜「(被害者は) 今そういう(迷っている) 状態で、とりあえず相談だけでもいいけれども、ちょっと(連携を) おねがいしたい」とかいうふうにいえば、弁護士もちゃんと心得ているので(law4)＞といったように、「要望をはっきりとさせてつなぐ」工夫が重要だということだった。何を求めて紹介したかが分からないと、連携先で誤った対応をされる場合があるので、相互に業務内容を把握したうえで、要望を伝えて連携をしていると語られた。さらに「早いタイミングでつなぐ」ことも重要であった。＜連携を取る時のこつ、やっぱり結構早い段階で、会っておいていただくというのが一番スムーズなのかなと思いますね(sou2)＞等の語りが見られた。性犯罪・性暴力被害者支援では、証拠が消えないうちに届け出をする、加害者からの示談交渉に対応する、刑事手続への関わり方を決める等、様々なタイムリミットが存在し、時間が過ぎるほど、提供できる支援が狭まると語られた。法的な側面から刑事手続の支援を行う弁護士、全体のコーディネートを行う相談員共に、なるべく「早いタイミングでつ

なぐ」と良いということだった。

さらに実際に連携先に被害者をつなぐ場合「ある程度の強引さ」が必要だと語られた。＜（連携先に）行ってみようかなって言ったら、その場で（連携先に）電話してアポ取りするんですよ（law2）＞といったように、被害者の目の前で連携先に連絡し予約を取る、被害者が躊躇っていても少し強引に相談を勧める、被害者が連携先に相談に行くときに付き添っていく等、普段の業務よりも一歩踏み込んだ紹介をしていた。但し、これは連携先との信頼関係がある上で行われているとも語られていた。

また、連携先を信頼していると同時に、被害者に対していろいろなメンタルの相談の窓口はいっぱいあるけど、犯罪被害に特化しているのはここだけだし、ここで出来ないことはほかでも出来ないから、と説明する（law1）＞といった語りから「連携先への信頼（を見せる）」というカテゴリが見出された。例えば、被害者に対して連携先への信頼と有用性を丁寧に説明する、被害者の目の前で連携先とやり取りをして信頼関係があることを見せるといったことが語られた。すでに信頼を築いている支援者が信頼している機関あるいは専門職であれば、被害者が安心して連携先に相談に行くことができるということだった。連携した後は＜本当に細かいことであっても（連携先に）連絡するようにして、（中略）いろいろな情報があるほうがおそろくいいと思いますので（law2）＞と、「連絡を密に（具体的に）行う」ことも重要であった。先述したように、刑事手続では様々なタイムリミットが存在する。従って、被害者に許可を得た上で、こまめに、具体的に情報を交換することが、よい連携を行う工夫だということだった。

4-3. 『連携で避けるべき点・課題』

『連携で避けるべき点・課題』は、連携がうまくいかなくなるために避けるべき点、「機関同士の相互理解がない」「連携先の性犯罪・性暴力被害に対する知識がない」の2つのカテゴリから生成された。

「機関同士の相互理解がない」と、連携をしようとしても、どういった点で連携できるか分か

らず、かえって被害者に不安を生じさせると語られた。例えば相互理解がない場合は＜（連携先に遠慮して被害者に）当たり前のことしか言えなくなっちゃったりして、それで後は（支援）よろしくね、みたいに（丸投げる形）になっちゃう（sou4）＞等連携がスムーズにいかない。また＜医療機関だったら（中略）法的なところには興味がなかったり、法的なところって、あまりメンタル面のところには興味がなくて（sou2）＞といったように、「連携先の性犯罪・性暴力被害に対する知識がない」場合も、被害者が思わぬ二次被害を受け、傷つくのではないかと不安になるということだった。

4-4. 『連携のメリット』

連携は『連携のメリット』が大きいとも語られていた。これは「支援に複数の手が入る（内部・外部連携による）」「本来業務に専念できる」「信頼できる人が増える」というカテゴリから生成された。

まず「支援に複数の手が入る（内部・外部連携による）」だが、＜連携は、いろんなところが、いろんな時点で、いろいろサポートして、それがどんどんつながってみんなでサポートしたらいいと思ってます（sou2）＞等、問題が複雑で多岐にわたり、関係する機関が多いからこそ、支援に複数の手が入ることが、被害者のためになっていた。そして、他の専門家と連携することで、それぞれの機関、専門職が「本来業務に専念できる」というカテゴリも見出された。＜精神面のフォローをしてくれる人がいて（中略）メンタルを保って、（刑事手続上の）決断をちょびっとだけでも出来るように持っていくと、私は有難いですよね（law1）＞等、例えば、弁護士が精神的サポートを相談員や心理専門職に委ねることで刑事手続の法的側面の支援に専念できる、相談員が法律について支援を弁護士に依頼することで精神的サポートや刑事手続を乗り越えるための支援に専念できるということだった。さらに被害者にとって「信頼できる人が増える」ことも、連携の重要な点であると語られた。連絡が取れなくなったとき、被害者と信頼を築いている他の機関が連絡をとることができる、あるいは、被害者は対人不

信感が強い場合や、被害について身近な人に相談できない場合に、＜支援者（相談員）の方が「どうした?」「元気?」みたいなのを聞いてくださるといいかなと思ったりはして（law3）＞と、「信頼できる人が増える」ことが被害者を支えるということだった。

考察

1. 性犯罪・性暴力被害者の精神的反応から考える支援の困難さ

本調査では、支援者の目からみた性犯罪・性暴力被害やその支援の特徴が、支援者の語りから明らかになった。特に、社会的背景の問題、援助要請の困難さ、精神状態による支援の困難さが語られた。

中島（2016）は、性暴力被害者の相談を妨げる要因として、「恥ずかしくて誰にも言えなかった」こと、および被害者に対する偏見や二次被害の問題を指摘している。性犯罪・性暴力被害は通常の性行為とは異なる暴力被害であり、本来は被害者が恥を感じる必要はない。しかしこの問題は「社会的偏見がある」「もともと性に関することは人に話さない」というカテゴリに現れているように、支援者にとっても、社会に根強く残っていると感じられている。こうした社会的通念、社会的背景の問題が、被害者が「事件内容を話すことに話しづらさを感じる」、つまり被害者の援助要請の妨げや、支援の困難さに関係していると考えられる。そして性犯罪・性暴力被害は警察庁（2015）において示されている通り、被害者の精神的後遺症が深刻である。被害者は事件後、フラッシュバックを起こす、事件について自責感や恥を感じるといった場合が多い（齋藤ら、2008）。それは支援者から見ても「精神的な不安定さが強い」「自責感や恥等の認知を抱いている」といった形で表れていた。前述の通り、被害者が自責感や恥を感じる必要はない。しかし実際には自責感や恥は存在し、「援助要請にしづらさを感じる」、「事件内容を話すことに話しづらさを感じる」状態を引き起こし、被害者に支援が届きにくい一因になっていると推察される。また、性犯罪・性暴力被害では、被害届出、加害者からの示談の申し入れ、裁判での意見陳述、裁判傍聴、被害者

参加、損害賠償請求等、検討、選択しなければならないことが数多く存在する。本調査では、支援者たちが被害者の「意思を尊重する」一方で、被害者は、「意思決定が揺らぐ」状態にあると語られた。精神的に不安定な状態で、事件のことを想起させるような内容について意思決定を下すことは、被害者にとって大きな精神的苦痛をもたらすと考えられる。

上記の問題は、支援の困難さとも直結する問題である。被害者は「事件内容を話すことに話しづらさを感じる」ことが多いため、支援者も「事件の内容を聞くことができない／しない」。また、被害者は感情麻痺や解離を示す場合もあり（小西、2006）、それが、「状態の把握が難しい」ことを引き起こしているとも推測される。被害者の意思決定も揺らぎ、状態の把握が難しい状態では、適切な支援を継続していくことは難しい。さらに、性犯罪・性暴力被害者は事件を想起させる事物に触れると多大な苦痛を感じるため、それらの事物を回避するという、回避症状を呈していることが多い（齋藤ら、2008）。「連絡が取れなくなる」「つながりにくい」は、こうした回避症状の影響も大きいと考えられる。また、被害者の協力なくしては、事件の起訴や公判の維持は難しく、刑事手続の半ばで「連絡が取れなくなる」ことは、支援者はもとより、検察や警察にとっても非常に大きな問題であろう。それはひいては、加害者を適切に処罰できないことにつながり、被害者のさらなる苦しみを生む可能性もある。

2. 一歩踏み込んだ支援、一歩踏み込んだ連携

これらの問題に、支援者は、様々な方法で取り組んでいた。

性犯罪・性暴力被害は、他者からの理不尽な暴力により、意思や尊厳が蹂躪される犯罪である。齋藤・鶴田・飛鳥井（2014）は、性犯罪・性暴力被害者の精神的回復において、失われた尊厳が取り戻される過程を明らかにし、その重要性に言及した。「意思・意向を尊重する」「権利を尊重する」「人としての尊厳をもって関わる」という支援の工夫は、まさに被害者が自己の尊厳を取り戻すために重要な対応であると考えられる。

また、支援者は、支援のコーディネーターを置き、それぞれの専門職が役割分担をすることで、それぞれの「本来業務を全うする」よう努めていた。性犯罪・性暴力被害者支援には「**関わる機関が多い**」が、支援者は、被害者が置き去りにならないよう、「**他の専門性が必要**」などときには連携をし、役割分担を明確にしながら支援にあたっていることが明らかになった。そして「**連絡が取れなくなる**」ことに対しては、多くの機関が関わり「**支援に複数の手が入る**」状態にし、連携先と「**連絡を密に（具体的に）行う**」ことで、1つの機関が連絡が取れなくなっても、他の機関や専門職が連絡を取れるよう工夫されていた。

齋藤ら（2010）は、事前に段取りをし、役割分担を行った上での支援の重要性、連携先機関に関する知識を持つ重要性を見出した。本調査でも、「**他の専門性が必要**」などに連携するという役割分担の重要性、「**機関同士の相互理解がない**」ことが連携を妨げることは語られていた。さらに本調査では、性犯罪・性暴力被害者への支援は、一歩踏み込んだ支援、連携が重要であると語られた。被害者は、支援機関に「**つながりにくい**」状態である。これは、被害者の「**精神的な不安定さが強い**」「**自責感や恥等の認知を抱えている**」状態、および偏見や二次被害（中島、2016）、感情麻痺・回避等の影響（小西、2006；齋藤ら、2008）が関係していると考えられる。そのため、ただ紹介をする、リーフレットを渡すだけでは、連携はつながらない。「**連携先への信頼（を見せる）**」や「**ある程度の強引さ**」という語りは、このような問題を解決するための戦略的な対応であると考えられる。例えば、連携先に被害概要をあらかじめ伝えておくことを被害者に伝えたならば、被害者は事件内容を改めて話す必要はなくなり、回避や偏見への抵抗が軽減される可能性がある。また、一度信頼関係を築いた支援者が連携先への信頼を見せたならば、二次被害への恐れも弱まる。性犯罪・性暴力被害者支援では、刑事手続支援等において、被害者の意思や意向を尊重することは重要である。しかし、支援が必要であると支援者と被害者両者が認識しているならば、一歩踏み込んだ支援、連携を行い、被害者の背を押す

対応も重要であると考えられる。

3. 性犯罪・性暴力被害者支援と課題

本調査からは、支援者の語りから、被害者の精神的な不安定さおよびそこから発生する支援上の特徴を踏まえた上で、様々な機関や専門職が連携をしながら、それぞれの本来業務を全うし支援にあたる重要性が示された。また、形式的な連携ではなく、連携先との信頼関係を築いた上での、一歩踏み込んだ支援が必要であった。

これまで、性犯罪・性暴力被害者支援における支援・連携の重要性は、第3次犯罪被害者等基本計画（2015）でも指摘されてきた。しかし具体的な支援・連携の戦略は示されてこなかった。本調査で得られた知見は、具体的な戦略として活用できる可能性がある。調査では、一歩踏み込んだ支援、連携を重ね、有機的な連携が築かれることで、被害者が、精神的サポートを受けながら、刑事手続や民事手続を乗り越えていくことができる姿が語られた。

しかし、未だ社会の偏見は根強く、性犯罪・性暴力被害特有の社会的背景も存在する。さらに支援機関や専門職が、これまで述べられた性犯罪・性暴力被害者支援の特徴を理解せず、互いの業務内容を把握していない場合、支援が妨げられるだけではなく、被害者が傷つく事態に陥る。社会の見方を変えていくこと、性犯罪・性暴力被害者の状態を理解して支援を行うことの重要性を広めていくことは、今後の重要な課題であると考えられる。

4. 本調査の課題

本調査では、性犯罪・性暴力被害者支援に関する支援者の経験による知見が得られた。しかし一方で、調査手法上の課題も多く存在する。まず、本調査は性犯罪・性暴力被害者支援に関する探索的な研究であったため対象を11名と少なくし、かつ職種を弁護士と支援員に限って調査を行った。支援には、他にも、医師や臨床心理士、社会福祉士、警察や検察等の支援担当者等、様々な専門職や機関が関わる。立ち位置や役割が異なる場合、支援に対する見方が変わる可能性がある。従って、今後、職種や対象人

数を広げて調査を行う必要があるだろう。また、今回の調査対象者は、基本的には関東圏内で支援を行っている人々であった。都心と地方では性犯罪・性暴力の認知件数が異なる（警察庁、2017）ため、支援の様相も異なる可能性があり、対象地域を広げる必要がある。調査手法についても、インタビュー調査では細かな支援の工夫を聞き取ることができるが、その支援手法が実際有効かどうか、今回見出された特徴が、他の犯罪被害と本当に異なるかどうか、アンケート等を使用した調査も実施する検討する必要がある。そして、支援は支援を受ける側の意見も重要であり、支援を受けた被害当事者への調査も重要である。性犯罪・性暴力被害者支援の一層の充実のため、さらに調査を重ねていく必要がある。

謝辞

本研究にて、貴重なご経験、知見を語ってくださいました弁護士の皆さま、民間被害者支援団体相談員の皆さまに心より感謝申し上げます。お忙しい中、ご協力を誠にありがとうございました。なお、本研究はJSPS科研費JP25780426, JP17K04441の助成を受けたものです。

【引用文献】

- 1) グレック美鈴・麻原きよみ・横山美江(2007). よくわかる質的研究の進め方・まとめ方看護研究のエキスパートを目指して 医歯薬出版株式会社
- 2) 法務省(2015). 「性犯罪の罰則に関する検討会」取りまとめ報告書 (http://www.moj.go.jp/keiji1/keiji12_00090.html)
- 3) 警察庁(2015). 平成26年度犯罪被害類型別調査 (<https://www.npa.go.jp/hanzaihigai/kohyo/report/h27-1/index.html>)
- 4) 警察庁(2016). 第3次犯罪被害者等基本計画 (<https://www.npa.go.jp/hanzaihigai/info280401.html>)
- 5) 警察庁(2017). 犯罪統計 (<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/sousa/statistics.html>)
- 6) 小西聖子(2006). 犯罪被害者の心の傷—増補新版, 白水社
- 7) 小西聖子(2016). 性暴力被害者支援の歴史と展望 小西聖子・上田鼓(編) 性暴力被害者への支援 臨床実践の現場から (pp.193-214) 誠信書房
- 8) 中島聡美(2016). 性暴力被害者のメンタルヘルスと心理的支援 小西聖子・上田鼓(編) 性暴力被害者への支援 臨床実践の現場から (pp.2-24) 誠信書房
- 9) 大岡由佳・伊藤富士江(2016). 被害者支援の現状—地方公共団体の総合的対応窓口に対する調査をもとに (2)—相談受理のあった60か所の調査結果— 日本社会福祉学会 第64回秋季大会抄録集 205-206.
- 10) 大岡由佳・野坂祐子・中島聡美・岩切昌宏(2015). 性犯罪被害児・者の実態とその課題—民間被害者支援団体の調査結果を踏まえて— 学校危機とメンタルケア, 7, 55-68.
- 11) 齋藤梓・鶴田信子・飛鳥井望 (2008). 被害者支援—司法/PTSD 下山晴彦, 松澤広和(編) 実践心理アセスメント—職域別・発達段階別・問題別でわかる援助につながるアセスメント. 日本評論社, 153-160.
- 12) 齋藤梓・鶴田信子・飛鳥井望(2016). PE療法中のナラティブを用いた性被害後の生じる「汚れ感」の質的分析. 心理臨床学研究, 31, 988-998.
- 13) 齋藤梓・元木未知子・鶴田信子・萱間真美・飛鳥井望(2010). 被害者支援における良好な機関連携の質的分析による要因検討 ト라우マティックストレス, 8, 147-157.

—2017年9.22.受稿, 2017年11.15.受理—

Features of support to victims of sexual assault

—based on an interview survey of support providers—

Azusa Saito

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Kaori Okamoto

Seisen jogakuin college, Faculty of Human Studies

Mejiro Journal of Psychology, 2018 vol.14

[Abstract]

In recent years, support for sexual assault is provided by crime victim support centers as well as various institutions and professionals. Even so, this still cannot be said to suffice, and there are many instances where the format of support has yet to be finalized. This study aims to clarify the features of and approaches to support to victims of sexual assault on the basis of an interview survey of individuals who have been engaged in providing such support, asking them about approaches to and challenges in providing or collaborating to provide support to victims of sexual assault. The survey was comprised of 11 lawyers and victim support consultants. A qualitative analysis of the obtained data resulted in the creation of four main categories: “features of sexual assault harm,” “difficulties faced by and recovery for victims of sexual assault from the perspective of support providers,” “features of support to victims of sexual assault,” and “features of collaboration.”

keywords : sexual assault, crime victim support, qualitative analysis